

「ここ数日はうだるような暑さだったが、今日は少し雲が厚くて風が出ていたので過ごしやすい。天気予報では降水確率は二十パーセントと言っていた。まあ降るまい。」

気温は高すぎず低すぎず、加えてここ二週間強という期間、ほぼ毎日いろいろな意味でこちらの体温を上げている厄介者もいない。

穏やかだ。なんとも言えず心地良い。

隣にいる彼女の存在も、この穏やかさに一役買っているのかもしれない。

「ねえ保美、重くない？ そっち、ひとつ持ちましようか？」

「いえ、別に平気です。これくらい」

ふわふわした髪を少しだけ跳ねさせながら、隣を歩く相沢保美は両手に提げたビニール袋を持ち直す。彼女が持っている袋の中身は、スナック菓子とか紙コップとか、およそ重量感とは縁のないものばかりだから本当に平気なのだろう。梢子の言葉は少々過保護である。

それに、梢子の方はペットボトルや生鮮食料品を担当している。わずかなりとも気遣いのできる人間であれば、たとえ辛くても「じゃあお願いします」とは言えない状況である。

それでも、今日の保美はどことなく体調が悪そうで心配だったのだ。杞憂なら良いのだが。

二人の荷物を見て判るとおり、彼女たちは買出しに出ている。量はおよそ八人分。

盆を過ぎて多少時間ができた佑快和尚が、ナミを連れてこちらへやって来るといふ連絡を顧問から受けたのが昨日。彼女の父と佑快は古くからの知り合いなのでそちらへ数日滞在するらしい。佑快自身が久闊を叙したいのと、ナミに梢子たちを会わせたいというのが理由だとか。

それなら一同集まって夕食でもという話になったのだが、さすがに葬家にぞろぞろと押しかけるわけにもいかない。近くの河川敷でバーベキューなどはどうかと花子から案が出て、特に異論もなかったので決定となった。

「ナミ、相変わらず声は出せないけれど元気だった」

保美があの子を気にかけていると知っていたから、梢子は入手したばかりの情報を惜しみなく提供する。「そうですか」保美は仄かに笑った。

なんとなくだけれど、そんな彼女の笑みはナミに似ている気がする。あの子が高校生くらいになったら、双子のように似るかもしれない。

「結局、どこの子が判らなかつたんですね」

「そうね。佑快和尚が養子縁組の手続きを進めてるって言うていたけど」

「和尚さんは優しいから、きつとナミちゃん、幸せになれるますよね」

「当たり前じゃない。大丈夫よ」

左手の袋を持ち替えて、空いた手のひらで保美の頭をくしゃりと撫でた。心配性な彼女は、こうしてやると安心してように表情を緩める。

保美といるとなんだか落ち着く。安らぐというか和むというか、とにかく風のような気持ちになれる。波風ばかり立てるのが近くににいるから、余計にこの時間が心地良い。こんな時間がいつまでも続けば良いのに。来年には自分が卒業してしまうから、それからは今のように簡単に会えはしなくなるけれど、時々、月に数度でも顔を見られたら良い。彼女は身体が弱いから、そんなふうに様子を見られないとなんだか不安だ。こちらを引っかき回してばかりの知力体力時の運を兼ね備えたアメリカ横断できそうな元気者なら、一年くらい音沙汰がなくても大して心配もしないのだが。

それにしてもさつきからちらほらあの顔が浮かんでくるのがやけに腹が立つ。

思わず溜め息が洩れてしまつて、保美に顔を覗き込まれた。

「梢子先輩？ 荷物、重いですか？ やっぱりわたしももう少し持ちましようか？」

「違うわよ。これくらいなんてことないから」

「でも、梢子先輩にはかり重いもの持ってもらっちゃって……」

申し訳なさそうに眉を下げる保美に、梢子はわずかに目を細めた。良い子だ。優しい。

その優しさのせいで、折につけ無理をしてしまうと知っているから、梢子は明るい声で「大丈夫」と応える。

「保美になにかあつたら百子が黙っていないもの。もうすぐ着くし、体力に応じた分担するのは当たり前なんだから、保美は気にしなくていいの」

「は、はい」

それからは保美も我を通そうとはせず、ややのんびりと河川敷までの道を二人で歩いた。

「動物性タンパク質！」

「開口一番それ？」

しかも目が合った次の瞬間だった。

百子が梢子めがけて……というよりは梢子を持っている袋をめがけて突進してくる。

思わず避けた。

袋を奪おうとした手はあっさり空振りし、その勢いを借りてくるりと半回転した百子は、恨みがましく梢子を見つめた。

「オサ先輩……ざわつちばかりでなく、肉まであたしから奪おうというんですね……！」

「いや別にどっちも奪ってないし」

大体、買出しを梢子と保美に行かせたのは百子自身だ。奪ったとは心外である。わざわざ買出しに出かけたこちらの行為と好意を侵害された、と言っても過言ではない失礼ぶりだ。

百子はわざとらしくいじけて、落ちていた木切れを蹴ってなんか見せてくる。

「いいですよーだ。あたしはミギーさんと楽しく愛の巣を作ってましたから。何百畳か判らないくらい広いLDKバストイレ付きですよ」

見渡す限り砂利が広がる河べり（リピング）、ブロックを積み重ねて、上に鉄板を乗せた作ったかまど（キッチン）、雄大に流れる河（ユニットバスか）。

うっかり生ぬるい表情をしまっ梢子と保美だった。

「随分サイバルな愛の巣ね。あたしはちょっと遠慮したいかなー？」

汀が苦笑しながらやって来て、もふ、と百子の頭に両腕を乗せた。

「おかえり。百ちーが拗ねるから、早いとこ肉を与えてあげて」

「言われなくても取ったりしないわよ」

この二人、せっかく和やかだった先ほどまでの気分を、ものの三分で台無しにしてくれた。

味方を得た百子が肉肉と騒ぐので、持ったままだった袋を押し付けてやる。肉だけでは重過ぎるかもしれないという保美の意見を取り入れて、海老やイカなどの海鮮類も買ってみた。これも動物性タンパク質だから百子も文句はないだろう。

「まったく、いつまで経っても落ち着きがないわね、百子は」

「はは……」

保美もフォローできなかつたのか、愛想笑いで誤魔化する。

それから少しだけ視線を下げて、

「百ちゃん……汀さんのこと、好きなんでしょう？」

軽く面白い冗談を言ったが、梢子は特に笑わなかった。

「まあ、好きは好きでしょうけど。どちらかといえば、うまが合うんじゃないの？」

「そう……ですか」

「ああ、さっきの愛の巣ってやつ？ それなら邪魔者が五人もいるから大丈夫よ」

この状況で何か起こったら奇跡だ。梢子にしてみれば羨ましいくらいである。ああ、ちょっとばかり嫌なことを思い出してしまった。昨晚の出来事とか。いい加減諦めて欲しい。本当に、こちらにも誰でも良いから邪魔者が入ってくれないものだろうか。そうしたら二日に一度くらいの頻度で大事なものを賭けた決闘などしなくて済む。

誰しも譲れない一線というものはあるのだ。そう、百子にとつての肉のように。

「そういえば百子、和尚たちはまだ？」

そんな譲れない肉を汀に頭上高く掲げられ、なんとか取り返そうと飛び跳ねていた百子が首だけをこちらに向けてきた。

「もうすぐ来るはずですよ。二十分くらい前に連絡あり

ましたから。ミギーさん、さっさと肉を返してください」

「さて百ちゃん、そこに一本の棒があります。この肉を取るにはどうしたらいいでしょう？」

「なるほどミギーさんはあたしを本気にさせましたよ」

百子が火かき用の棒を手にする。彼女は合理的思考により見事肉を取る事ができるだろうか。

「メエエエエン！」

とても直情的でした。

当然だが、ひょいっとよけられた。

その隙をついて梢子が汀から肉を取り上げる。「食べ物

で遊ばないの」「ああっ、後ろからは、オサの卑怯者」

聞く耳を持たずに梢子はパックを袋に戻した。

「和尚たちが来る前に下準備は済ませちゃいましょう。保

美、どうしたらいい？」

「お肉はそのままで大丈夫ですけど、海老の殻剥きとか」

「じゃあ汀お願い」

「えー、なんであたしが」

「遊んでた罰。それくらいやりなさい」

一緒に遊んで遊んでいた百子には火起こしを申しつけた。さすがにバツが悪かったのか、彼女は素直に従う。

あとはなにがあるだろうかと考えていると、ポケットに入れていた携帯電話が着信を知らせてきた。取り出して確認する。こちらに向かっているはずの葵花子先生からだ。た。

「もしもし？」

『ああ、小山内さんたち、どのへんにいるのかしら？ 河川敷まで来てるんだけど見つからなくて』

「じゃあ、私が迎えにいけますから、何か目印になるものがある所にてください」

待ち合わせ場所を決めて通話を終える。それほど離れた位置にいるわけではないようなので、数分で戻ってこられるだろう。

「ちよつと行ってくる。保美は少し休んでなさい。顔色、さつきより悪くなってるように見えるし」

「は、はい、すみません……」

「別に謝るようなことじゃないから」

「はい……」

白さが浮き立つ肌は痛々しい。するりと頬を撫でる。彼女は少し驚いたようだ。「あ、その、温めた方がいいかと思つて」別にそんな必要はないのに、梢子は不意に慌てて言い訳をした。

とにかく、と保美をキャンプチェアに座らせて、梢子は迎えのために歩き出した。

そんな梢子の姿を、汀は海老の殻剥きをしながら見ていた。

その表情は……どこか、つまらなそうだった。

梢子が花子たちを連れて戻るまでに要した時間は十分弱。光景は大して変わっていない。かまどに火が入って、汀の足元に置かれたビニール袋に海老の殻が増えた程度だ。

「ごめんね遅くなって！。来る途中、ちよつと買物してたから」

「ふむ。さすがにお嬢さんたちに頼むわけにもいかんでな」

その言葉どおり、彼女の後ろを歩く佑快の手には、未成年では購入出来ない六缶パックが四つ。二十四本である。

二人で全部飲むつもりだろうか。……飲むだろう。

「……！」 キャンプチェアから動かずにいる保美を見つけて、梢子と手をつないでいたナミが駆け出した。手を離そうとしないので梢子も引つ張られるかたちで追隨する。梢子はわずかばかり苦笑した。

「あ、ナミちゃん」

「……………」

ナミが保美に飛びつく。花開く笑み。全身が喜びで、それは子犬を連想させた。

「いらっしやい。元気だった？」

「……………」

こくこくと頷いたナミは、保美にしがみついたまま離れない。「ナミ」呼びかけて、梢子が小さな身体を抱き上げた。

「保美は少し疲れているから、こっちにいなさい」

「……………」

「あ、別に大丈夫ですよ。ナミちゃん軽いですし」

「駄目。あなたさつきより具合悪そうにしてるじゃない。横になった方がいいんだろうけど、ここじゃちょっと難しいか……………」

日が翳ったせいかと思ったが、近くで見るとやはり先ほどより更にそのかんばせは白い。座ったまま動かずにいるのではなく、動けずにいるのではないか、と勘繰りたくなるような様子だ。

いくらナミが小さくて軽いといっても、一人一人分の重量を膝に置いて平気だとは思えなかった。

地に足をつけたナミは梢子の腰にまわりついていて、

引き剥がすのも気が引けて、梢子は彼女をそのままにしていた。

「小山内さん、おつまみはないのかしら」

「ああ、こっちに置いてあるので、今持って行きます……………」

「……もう飲むんですか、先生」

見れば、さつさとシートを広げてそこに座り込んだ二人が、口の開いた缶を片手に乾杯なぞしている。なるほど、これが食べる前に飲むという大人のマナーか。飲む物を間違えているような気がするけれど。

「ナミ、ちょっとだけ待っててくれる？」

「……………」

小さな少女の白い髪を撫でながら、宥めるようにお願いしたが、彼女は聞き入れてくれず、梢子から手を離そうとしない。

「困ったわね…………」。綾代でもいれば、ナミを見ててもらえるんだけれど」

ふう、と溜め息。面倒見の良い副部長は、もちろん誘われていたが帰りが遅くなるからと両親の許しが出なくて欠席となっている。その連絡をしてきたとき、彼女はものすごく残念そうだった。

梢子が弱りきっているのを見かねて、「ナミちゃん、わたしと一緒に」保美が助け舟を出そうとしたその時。

「ナミ」少し離れた位置から声がかかる。汀だった。

殻剥きを止めて、ちよいちよい、と手招きしている。

「こつちでお手伝いでもしない？ お駄賃あげるわよ」

「……………」

きよとんと汀を見ていたナミだが、呼ばれたのならば行かなければならないのだろうと判断したか、梢子の腕からすり抜けてそちらへ向かった。

待ち構えていた汀は気づかれない程度に左目を細める。

目の前に来た小さなモノを視る。

害はない、か。

人に仇なす人ではないモノを切るのが鬼切り部。しかしこの小さなモノは怪異であっても害意はないようだ。力も弱い。あまり神経質になることもなさそうだ。

それどころか。汀は口の中だけで独白する。仇をなすどころか、自分自身こそが危険なようにさえ見えた。その存在自体の危うさ。弱いというより、弱っているのか。外見は特にやせ細っていると、顔色が悪いとかいうことはない（この白皙では判じにくいけれど）が、本質的な存在感が非常にあやふやだ。飢えているのだと汀は見る。

ナミは青く光る汀の眼に、おびえたように縮こまっている。その仕草に汀は小さく苦笑して、その青を仕舞った。

鬼切り部は、人に仇なす人ではないモノを切る。

では、人に仇なさぬ人ではないモノに対してはどうするのが良いだろう。

汀は思考を切り替える。鬼切り部としてではなく、喜屋

武汀として結論を出す。

「じゃあナミ、ミギーさんがやってみせるから、同じようにするのよ」

ペリペリと汀の手が海老の殻を剥いていく。まだ半分が凍っているそれは固いし冷たい。寒くないのに指先ががじかむ。ナミは興味深そうにその手元を眺めていた。

見つめられた緊張で手元が狂った、というわけではなかったのだけれど。

「……………」

息を呑むような音がナミの喉から洩れて、視線が固定される。一瞬だけ眉が歪んで、それから眼の色が変わった。

「あちゃー、失敗失敗」

赤。流れるほどではない、じわりと手のひらに滲むその赤を、ナミがじっと見ている。

汀はその視線をよく知っていた。

そう、もしかしたら、己があのまますぐな彼女を見る時、こんな目をしているのかもしれない。

つまらない推測だ。

手を取られた。小さな手は動かない。蒼い視線も動かない。半分凍って固い海老の殻で切った手のひらは、放っておかれて、どんどん赤を増す。

「ナミ、心配してくれてるの？」

「……………」

「大丈夫よ。これくらい、舐めておけば治るから、」

「……………っ！……………」

弾かれたように上がった顔を汀は間近で捉える。青のないう両目が捕らえる。「……………」驚いたのか、ナミが「ひゃうっ」という感じに身をすくめた。

一定のリズムで、じくじくと傷が疼いた。遠慮がちな、しかしどこか恍惚とした表情でナミが汀の瞳を見据える。

「本当に平気だから」念を押すような口調で更に言い募ると、解放的な表情になった鬼子が頷いた。

ぬるり。己の血液と彼女の唾液が交じらう。どこことなく背徳を覚える汀だった。色々なものを裏切った気分だ。鬼切り部の理念とか、己のアイデンティティとか、彼女の信頼とか。

出血はそうひどくはない。かすり傷程度だ。ぴちゃり、水音。飢えた子ども達の強欲が手のひらの傷に追い討ちをかける。吸い付かれて、その感触の気持ち悪さに汀は顔をしかめた。

背後から砂利を踏む音が迫ってくる。汀はやや意識をそちらに向けたが、特に警戒もしない。すでに馴染んだ気配だ。ちよつと怒ってるっぽいあたりなどは慣れ親しみすぎて久しい。

「ちよつと汀、なにをしているの」

汀の手のひらに顔をうずめるナミを凝視しながら、梢子が不信感のこもった口調で問いたずねてくる。「んー、つまみ食い？」飄々と答える。表々の返答に裏々の凜々しさはない。

梢子が怒っているのに気づいたか、ナミが手のひらから口を外した。傷は残っていない。血も。

虚々うつろと視線をさまよわせるナミ。叱られると予想したのだから。その様子に怒気を削がれた梢子は溜め息だけを口から落とした。

海老の剥き身を見下ろし、

「まったく、そりゃあ生食用だから生で食べても大丈夫だろうけど、溶けかけだし、ナミがおなか壊したらどうするの」



「心配いらないうて。」

新鮮でおいしかったでしょ、ナミー？」

「……………」

こくん、と頷くナミに、「冷凍なんだから新鮮なわけないじゃない」梢子がまた溜め息をついた。

百子が肉にまみれて至福を得る。紙皿にキープした肉は山盛り。そんな彼女の行動を見越したうえで分量を一人分くらい多めに買ってきたのだが、八人分と言わず十人分でも良かったかもしれない。

「ミギーさんミギーさん、箸が止まってますよ」

「いや、あんたの食べっぷり見てるだけで満腹……………」

「まあそう言わず。なんでしたら『あーん』とかしてあげますけど」

どうぞ？と肉をつまんで汀に差し出す百子。「やめなさい。ナミが真似するから」微妙に危機感を募らせた梢子が止める。

「ナミーもあんまり食べてませんね。そんなことだと大きくなれないぞ？」

イカを噛み切れずに苦戦していたナミが顔を上げて、百子の手に乗った皿へ視線を移す。

「うえ」みたいな顔をした。

口ほどにものを言う視線が百子の口元を引きつらせる。

「な、なんか今、ナミーに馬鹿にされたような気がするのですが……………」

「気のせいでしょう。食べてばかりいないで、保美を手伝いなさい。いくらあなたでも、肉を焼くくらいはできるでしょう？」

「ふふふ、甘いですね。オサ先輩はあたしの腕前を過大評価しすぎですよ」

「できないんだ……………」

その保美はといえば、さつきからせつせと肉やら海老やらイカやらを焼いている。鉄板を半分空けて、同時進行で焼きそばを作る手際の良さなど、見事としか言いようがない。百子の腕も上達しないはずだ。

「百ちゃん、こっちのお肉ももう大丈夫だよ」

「肉！」

返答がそれなのはどうかのだろうか。

「焼きそばも、もうすぐ出来るから」

しばらく休憩していたのが良かったのか、保美はすっかり復調し、熱気渦巻く鉄板の前に陣取っていてもさして辛そうではなかった。そうでなければさすがに百子もこんなふうには暢気な態度は取っていない。

実のところ、肉を焼く程度であれば、いくらなんでも人並みにこなせる。要するに汀の邪魔をしているのだ。自分が保美と並べば、彼女はたやすく梢子に近づけてしまう。ただでさえ現状、一つ屋根の下というアドバンテージがあるのだから、こんな時くらい、ちょっと遠慮していただきたい。

だが哀しいかな、こと料理に関しては、保美は一人でなんでもこなしてしまうのだった。だから梢子もついつい任せてしまって、百子を注意したり、ナミの面倒を見たり、すっかり出来上がった花子と佑快の世話を焼いたりして、あまり保美にはかまけてくれない。

世界はかくも無情なりけり。  
梢子がナミを連れて佑快たちのもとへ行ってしまったので、百子も邪魔はひとまず小休止して食に全力を注ぎ始める。今までは抑えていたのだ。八割くらいに。

「うまー！ 焼きそばもうまー！ ほらほらミギーさん、ざわっちの焼きそばをご賞味あれ！」

「はいはい。じゃ、折角だからいただきますか」

汀が皿と小瓶を手にする。その手に取られたものが何であるかを見止めた百子が、素っ頓狂な声を張り上げた。

「なー!? 唐辛子なんて邪道ですよ。ざわっちが完璧に味付けしてるんですから、そんなのいりません」

「百ちゃん言いすぎだから……。人の好みってそれぞれだし」

微笑笑が漂って、百子はむう、と口を曲げた。「そういうこと」汀が気にもせず唐辛子を焼きそばにふりかける。

保美はいつたん調理の手を止めると、微笑笑のまま、少しだけ視線を揺らした。

「やつぱり、百ちゃんと汀さん、仲良いね」

「ん？ ま、まあ、お調子者同士、波長が合っちゃつてやつですかねえ……」

「そつ、か……」

どことなく不穏な、不安な空気を感じて、百子は箸を置いて保美の視線を探る。隣の汀は焼きそばをもぐもぐ食べていた。

「あたしはほら、この人間じゃないから百ちゃんも珍しいんでしょよ」

「まるで珍獣のようですね、ミギーさん」

「ある意味、的を射ているのかもね」

もの珍しくて人ではないもの、という意味で言ったが、百子は当然わからなかった。

ナミにせがまれたか、働きづめだから休憩を入れさせようとしたか、あるいは自分だけで酔っ払いの相手をするのに辟易したか、梢子が保美を呼び寄せた。

呼ばれた彼女は百子の皿を確認する。充分な量が残っていると判断したのち、四人の待つシートへ向かった。

「こつちでも、やすみに妬かれちゃったかしらね」

「ぬなっ。冗談じゃありませんよ。あたしはざわっちのためを思っ……」

「あ、でもそれはざわっちに愛されてるということですねっ」喜んでいいのかどうか迷いつつ、百子はこらえきれず小さく口の端を上げる。健全で完全だ、と汀は思う。愛されている実感の喜び。愛しているがゆえの哀しみ。どちらも己にはない。

たとえば平坦な地面にボールを置いたとして、それを少しくらい指で弾いてやってもボールはすぐに止まる。彼女はそんな世界にいる。

対してこちらはどうか。ぐにやぐにやに歪んで焦げ付いてデコボコで、止まっているボールは一度動き出せば、跳ね上がりながらいつまでも転がり続けて、そのうえ加速度がついていつかは人を傷つける強さを持つ。そういう世界に、喜屋武汀は存在する。

だから、夏の間だけだ。この歪んだ世界が凍りついて取り返しのつかない状態になる前に。

「そうしたら、オサがやすみんを選んでもいい」

「なんです、いきなり」

無意識に声が出ていたらしく、聞きとめた百子が問いかけてきた。

「百ちーは考えない？ オサがあたしを選んだら、自分にチャンスが」

「それ以上はやめてくださいね。いくら温厚な秋田百子といえども怒りますから」

「ふうん。考えたことあるんだ」

「……それでもあたしは、ざわっちの味方なんです」  
彼女はそういう愛だと主張する。それが己の進むべき道なのだと言する。

正解の世界にいる彼女が言うなら、やはり己は、正しくないのだから。

「ミギーさん、ほんとにはオサ先輩のこと、好きなんじゃないですか？」

「さて、どうでしょう」

表とも裏とも取れる声音で汀は答えた。百子が疑り深く見つめてくる。汀は真正面からその追求を受け止める。

嘘と正直の違いはなにか？ 真実というゼロを基点としてプラスに向かうかマイナスに向かうか、それだけしかない。X軸からいつだって九十度。ゼロから眺めればラインは見えない。ゼロに立つ百子はプラスとマイナス、どちらに線が伸びたか確認できない。

「オサ先輩は、どうなんでしょうね」

「どうでもいいわよ」

「え？」

火が小さくなってきたので、汀は新しい薪をその中へくべた。乾いた木片がゆっくりと燃えていく。爆ぜる音はどこか心地よい。火花が散って、ささやかな花火のようだ。

夏の花火はきらびやかで美しく、少しだけ寂しい。

「たとえオサがあたしを好きでも、オサはやすみんを選ばなきゃいけないんだから、オサが誰を好きかなんで関係ない」

「えーと……よく判りませんが、多分そこって、こういう問題で一番重要なところだと思うんですよ」

「そう？」

「そうですよ」

汀がひよいっと箸を伸ばして百子の皿から肉を一枚失敬する。防ごうとした彼女の反応は速かったのだが、一瞬だけ間に合わなかった。

百子が歯軋りする。これだけ食べておいて一枚が惜しいのか。筋金入りである。

それから、もう横取りされては堪らないとでもいうように残っていた肉をかきこみ始める。処理速度は明らかに要  
求量より低い。

ボトルネックは頬のふくらみという形で姿を表す。よく伸びる頬だった。今彼女を笑わせたら凄いことになるかもしれない。文字通り、凄絶で凄惨な状況に。やったらやっただで面白そうではあるが、結果としてもたらされる被害は甚大で、おそらく最も被害をこうむるのは汀だ。だからしない。

最後の肉をお茶で一気に流し込んだ百子が、汀をひたりと見据える。

「ミギーさん。今の話、本音ですかって聞いたら、答えはイエスですか？」

汀のいる世界に合わせたかのようなひねくれた質問に、問われた方はちらりと笑った。

「天使と悪魔の道案内？ 生憎だけど、あたしはどっちでもないのよね」

本当のことしか言わない天使にあらず、嘘しかつかない悪魔にあらず。さりとして、正直であろうとする人でもなく。

理性を捨てた人でなし。それが今の汀だ。  
だから、汀はその質問に沈黙で答えた。

すっかり日は暮れて、六缶パックもすべて空になった。よく飲んだものだと思子は感心する。途中、気が大きくなつた花子に「ちよつとくらいならいいんじゃないの？ 小山内さん」と勧められたが断固として断つた。言うまでもなく、彼女は教師だ。そして自分は生徒である。導く側が間違えてどうする。

花子も佑快もいだけ出来上がっているものの、足取りはしつかりしていた。どれだけ酔つても自分で帰宅できるのが良い酔者なのだとか。まあ、迷惑をかけられないだけ良いとは思うけれど、心配はかけているのだからもう少し控えて欲しかったと思わないでもない。

「それでは部長さん、今日はお世話になりました」

「……………」

真っ赤な顔をほころばせた佑快と、寄り添うナミがペコリと頭を下げる。促されて礼をしたが、ナミは名残惜しうだった。梢子の方としては泊めてあげても問題はないけれど、着替えなど諸々の準備がなにもない状態であるし、一度花子の自宅に戻ってからでは時間が遅くなりすぎてしまう。バーベキューで存分に燻された衣服を明日まで着させているのも可哀想なので、今回は見送りということになった。

「こちらこそ、いらしてくださいってありがとうございます」

答えながらも梢子は軽く落胆していた。もう少しこの子と一緒にいたかったという気持ちと、こんなに小さな子がいれば、汀も下手な真似はできなかつたろうに、という打算によって。

「残念だったわね、オサ」見事な観察眼で打算を読んだ汀がからかうように言ってきた。無視。

腰を屈めてナミと視線を揃える。

「ナミ、卯奈咲に帰る前に、また遊びましょう」

「……………」

心底嬉しい、とナミは表情で語って何度も頷く。それと同時に保美の服を引っ張って、あなたも一緒にとせがんできた。「梢子先輩が良ければ……………」「もちろん構わないわよ」遠慮する保美に頷きかけると、彼女は慎み深くはにかんだ。

約束、と小指を絡めて帰路につく。

折々で別れていって、梢子は汀と連れ立って自宅へと帰りついた。静かな夜だ。先ほどまで騒がしかったこととのギャップが激しい。

「ただいま」

「おかえり」

「……………」あなたに言ったわけじゃないわよ

「だって誰もいないし。応答がないと寂しいかと思って」

「別にそんなことないわよ」

ワーカホリックである梢子の両親は泊り込みで仕事だと夕方くらいに連絡が入っていたし、祖父は自室にいるのか、見える範囲に明かりはついていなかった。だから、さっきのはつい癖で出てしまっただけで、別に返答など期待していない。単身赴任の父親が洩らす寂しい独り言とは違うのだ。

「汀、先にシャワー浴びる？」

「え？」

「え？」

どこか呆けたような汀の表情に、梢子は訝しげに眉を上げた。

「オサ、それはもしかして誘いも」「違うから！」

真面目な顔でふざけたことを言い放ちかけた彼女に怒鳴りつける。なにを考えていやがるのだろうかこいつは。

ずっと火のそばにいたから、煤と煙で汚れているだろうという気遣いであって、胸中のどこを漁っても他意などない。「まったく……」彼女の言葉のせいで、意識とは関係なく首から上が熱を持つ。ごまかすために、いいからさっさと行けと汀の背中を押した。汀はクスクス笑っているからその輪郭がかすかに揺れている。腹の立つ背中だ。祖父に教わった点穴でも突いてやろうか。

「ああ、オサ」

なに？と尋ねる暇もなかった。

振り向きざまに汀が唇を重ねてくる。すばやい。猫が獲物を捕らえる動きみたいに、一直線で無駄のない口付けだった。虚をつかれた梢子の身体は凝り固まる。

触れるだけのキスは彼女の柔らかさを明確に伝える。ということは彼女にも伝わっているのだろう。弾力と熱。煙の匂いがする。けれど不快ではない。その匂いは何か慕わしい。煙の源は火。水の対極にあるそれを、水を嫌う汀に近しいと感じているのかもしれない。

熱が失われた。梢子は反射的に閉じてしまっていた目を開ける。にまり。底意地の悪そうな笑みがあつた。

「ただいまのキス」

「……そんな理由つけなくても、あなたいつもしてくるでしょう……」

まったく、これまで何度、こんな事態になったか判らない。いつもいつも不意打ちで、身体能力の差があるのか（梢子としてはあまり認めたくない）、避けようと思う間もなくされてしまうし、なにより腹立たしいのはなんかもう別に驚きもしくなってしまうことだ。

梢子は汀のそんな行為を悪戯の延長だと考えている。だから呆れるだけだった。怒ったり責めたりはしない。

人の気持ちに鈍感すぎる彼女は気づかない。

梢子を被害者のポジションに置くことで逃げ道を用意しているのだと、そんな可能性を思いつきもしない。

それが、彼女の持つ毒性。

汀と入れ違いに入浴を済ませて部屋へ戻る。自由気ままな猫は我が物顔で居座っている。猫は己にとって最も居心地の良い場所を見つけたのが得意だ。

逆に言えば、居心地の悪い場所には留まらない。

「オサと一緒にいたいから」などと彼女はうそぶくけれど、さすがの梢子も、彼女にあてがわれた部屋が皮肉にも（そして、当然の帰結として）もういない人が使っていたものであることを無関係とは思わない。単純明快なプラスとマイナスの逆転。こんなものは嘘とすら言えない。

汀が滞在しているのは半月と少しだというのに、なんだかもうすっかり、それを……彼女がいるのを、当然と思っているのが不思議だった。いきものと親しむには触れるのが一番だと良く聞くけれど、そのせいだろうか。お互いに遠慮など消えうせて、というか汀は色々と遠慮がなさすぎる気がするのだが、どうにかならないものか。こちらはかなり譲歩している。

つまり、触れる深度、とか。

今も。

今も、そうだ。

「汀、ちよつと……」

抱きくるまれ、頰動脈を舌先でなぞられて、ダイレクトな感触に吐息が熱を持つ。人体で最も径の大きな血管。それだけに脈動も大きい。速まる鼓動に彼女は気づいただろうか。手のひらはうなじを通して流れる髪を弄んでいる。時折、親指が耳朶をするりと撫でた。

煙の匂いはもつない。外的な慕わしさは失われた。今ここににあるのは彼女と己のダイレクトリンクのみ。

雲間から月が覗くように、不意に気弱で慎み深い笑顔が脳裏に浮かぶ。強欲に、暴力的に触れられているから、正反対の彼女を思い出した。もう眠ってしまっただろうか。大人しい子犬のような彼女。犬は夜になれば素直に眠る。夜に本領を発揮する猫とは違う。眠っているだろう。

会いたいなと幽かな意識が望んだ。保美が隣にいれば汀に触れたくなくて、汀と触れ合っていれば保美に会いたくなる。不実すぎる物心二元論だ。肉体と精神が別々のものを望む。

望む？

望んでいるというのか。

まさか。

それは不条理であり理不尽であった。梢子は頑強でそんなものには屈しない。膝を折るといふプライドのない行為には出ない。

彼女の揃えられた指が背の中心を走るラインを撫で降りる。梢子は許可を下ろさない。

「汀。もうやめなさい」

それは女王のように高潔な命令だった。汀は熱中していたゲームを取り上げられた子どもみたいな目をする。

どうして？ どうしてもっと遊んじゃいけないの？

楽しいものを一方的に取り上げる、どれほどの正当な理由があるというの？

しかし汀は一瞬にしてその色をまぶたで覆い隠す。「オサだつて嫌じゃなくせにー」軽々しい口調は女王に責務を負わせない。身を解かれた梢子は、わずかに乱れた服の裾を直しながら「そんなことないわよ」と精一杯の虚勢を張った。まあ、通じていないだろうけれど。

「もう遅いんだから、部屋に戻って寝なさい。あなただつて出かけて疲れてるでしょう？」

「そうでもないけどね。ま、スポンサーの言うことは聞いておきますか」

「素直に聞くフリをして、私が眠った頃に忍び込んだりしないように」

「そんなこと言われても、隠密行動は鬼切り部の基本だし」「鬼切り部は関係ない」

時は深夜。闇に沈み込んだ世界は停止している。

その中で動く影がひとつあった。影、まさに、だ。揺らめいて、不確かで、実のない幽体。

梢子は眠っている。小さくうなる。うなされる。

彼女の首筋に、幽体……鬼が、はりついている。梢子は眼を覚まさない。時折、喉の奥からくぐもった呻き声が洩れたが、意識が浮上する気配はない。夜の闇はなにもかもを沈ませる。

曖昧だった鬼の姿は時が経つにつれてその確かさを増した。日が落ちて闇が濃くなるように、はっきりとした輪郭を持ち始める。

鬼は切なく笑っていた。

「それ以上やると死ぬわよ？」

凪いでいた室内に空気の流れが生まれる。なかったはずのものがそこにある。いなかったはずのモノが、そこにいる。

克明な笑みは鬼切りの非道さで。



「こんばんは、囚われの髪長姫。王子様を待ちきれなくて自分で脱け出したの？」

ずるりと長い髪が、鬼の表情を隠している。わずかに覗く口元は警戒に引き結ばれていた。そこから些々とした声が洩れる。「アア……」その声は、悲鳴に似ていた。

同情を誘うような細かい悲鳴にも、汀は表情を変えない。

「どこの鬼か知らないけれど、鬼切りがいる時にオサを喰おうとするなんて、運が悪かったわね」

ひたり。持っていた棍を両手に構えて、その先端を鬼に向ける。慟哭が聞こえる。気弱で、怯えて、弱者の声だった。

「ん……？」汀はその声に見知った気配を感じ取る。まさか。しかし、これは……。

「ナミ……いや、それにしちや弱すぎるか……。あたしの血である子は回復したはずだし。

だとすると……」

知らず知らず、溜め息が洩れて、汀はその中に彼女の名前を混ぜて捨てた。

「ああ……。嫌になるわね、こういう展開」

世捨て人に似た表情で、なにもかも憂いという顔で、汀が唾棄するように呟いた。

苛立って、右手で髪の毛をかきむしる。

「今まで大人しくしていたくせに、どうして」

汀は知らない。

ナミがこちらにやって来たことで力のバランスが崩れ、彼女が危険に陥ったことも、彼女が大切に思う存在がやけに汀と関わるから嫉妬にかられたことも、それらが凝縮されて、標的が最も強い想いを抱く相手に定められたことも。

鬼切りではない、喜屋武汀がいる時だからこそ、鬼が顕現してしまったことを、汀は知らない。

「ま、いいか」

あつさりした口調でひとりごち、下がっていた棍を構えなおす。

切るか。

なんの感慨もなく汀は思考する。彼女はもう目覚めないだろうけれど、多数決で作られたこの世界にとってはそれで良い。嫌な役回りはもう慣れた。危険だから排除する、そういう愚鈍なルールに疑問を覚えるには、汀はもう鬼切りとして長く在りすぎてしまった。

「さようなら」いつかと同じ言葉を告げて。

「気は合わなかったけれど、あんなのことは嫌いじゃなかった。オサが選んでもいいと思えるくらいには」

好きでもなかったが、惜しいと感じる程度には情が沸いていた。それでも汀は迷わない。

鈴の音にも似た鞘走りと共に鬼へ切りかかる。「アアアアア……！」消滅を予感した鬼がきつく悲鳴を上げた。

「……………み……………」

悲鳴の隙間を縫うようにして耳へと届いた声。汀は思わず一瞬だけ手を止める。すぐに振り切ったが、刹那をついた鬼は間一髪で致命傷を避けた。

「はは……………まったく……………」汀の手から力が抜ける。鬼は切られたダメージでその姿をおぼろにしながら、汀から距離を置いてか細い声を上げた。痛みだろうか。

それを追うでもなく、汀は虚脱の表情で、眠っている彼女を横目に見やる。

先ほどの声。聞こえたのは一音だが、あれは三音のうちのひとつだった。そして、最初ではなく最後の音だ。

「ああまでされて、まだ心配するの？ オサ」

呆れた苦笑を浮かべながら、手の甲で額を擦り上げた汀は、眠る彼女のそばへ寄った。「アア……………」小さな非難は嫉妬だろうか。その声に込められた攻撃性を、どこことなく懐かしく感じる汀だった。

「鬼に嫉妬されるなんていうのは、初めてかもね」

これまで何体となく、数えられないほど鬼と対峙してきたが、そんな鬼にはついぞお目にかかったことはない。

恋しい相手に近づかれて、それをひがむなど。

そんなのは鬼のすることではない。

それは……………人の所業だ。

人だけに許された健全さだ。

ならば彼女は。

汀は小さく肩をすくめると、握っていた棍を手放した。かこん、と棍が落ちる。禍根を、今だけ足元に放る。

鬼が訝しげに揺らめいた。

「ミギーさんの人を見る目もなかなかのものだったってことよね。しかたないから鬼は見なかったことにしてあげる。

といつても、その傷じゃ逃げるのも覚束ないでしょう？

あたしの力を分けてあげるから、大人しく帰りなさい」

ダンスを申し込むような仕草で、右手を鬼に差し出す。

首は捧げない。そこまで……………その箇所を許すつもりはない。

「一日に二回も見逃すなんて……………。若にバレたら大目玉

だわ、こんなの」

まあ、さすがに遠い南の上役に知られることはないだろうけれど。守天党に、うら若き女性の寝室を覗く趣味のある人間はいない。

「大体、なんであたしがここまで身を切ってオサを助けなきゃいけないわけ？ 汀じゃなくて身切りじゃない。

喜屋武みぎり……………うわ、微妙に語呂が良いうえにちょっと可愛い……………」

軽く改名を考える汀だったが、可愛いのはキャラじゃな  
いなとその考えに見切りをつけた。

「それはともかく」逡巡している鬼へ、さらに腕を突き  
出して、

「ほら、さっさとする」

命令のように言われて、鬼はその申し出を受けた。

忠誠のキスに似た影の重なり。触れられた感覚はなかつ  
たが、手首の辺りから何かが吸い抜かれる感覚があつて、  
生理的な嫌悪感によつて汀は目を閉じた。

「今度オサを裏切つたら、その時こそ、あたしはあんたを  
切るわよ」

「……？」

顔を上げた鬼が戸惑い、汀はそれを見据える。

「そうなくても、オサはきつと許すでしょうけど。だから  
こそ、あたしはあんたを許すわけにはいかない。あの子を  
揺るがす存在を、喜屋武汀は許さない。

それだけは、覚えておいて」

判つたのか、それともただ単に怯えただけなのか、鬼が  
かすかにおののいて、それから力なく頷いた。

その姿が随分しつかりしているのを確認して、右手を引  
く。「さようなら。また学校で」別れの言葉は最後通牒に  
ならない。

鬼が消えてから、汀は眠りから覚めない梢子の傍らに腰  
を下ろすと、その顔を覗き込んだ。顔色は夜目にも白い。  
眉間のしわは消える気配がない。

指の背で頬をゆるゆる撫でると、彼女は少しだけ呼吸を  
荒くして、そうしている間に睫毛が濡れて、なんの抵抗も  
なく水滴が落ちた。「オサ」呼びかけながら涙を拭つてや  
る。白んだ顔は苦痛に歪んでいる。ゆっくりとまぶたが上  
がって彼女は汀を見つけた。

「……みぎわ……？」

「どうしたの？ 随分うなされてたみたいだけど」

夜明けのように白々と、汀はそんな問いを投げる。梢子  
は己が泣いていると気づいているのかいないのか、汀を見  
上げたまま重い息を吐き出した。

「……わからない。わからない、けれど。どうしてか、す  
ごく悲しい」

梢子は己の胸を締めつける痛みを悲哀と誤認していた。

それが実は、鬼と成ってしまった彼女に対する、信頼を  
裏切られた失望と、そんなふうになつてしまった彼女の現  
状に気づかなかつた己への憤慨であるなどとはまったく思  
いもせず、梢子はただただ、悲しいと涙を流した。

汀がベッドに肘をついて、その拍子にベッドが軋む。梢  
子は放心していた。心をどこかへ放つて失くしていた。

「嫌な夢を見たの？ 大丈夫よオサ、そんなのは夢で、目が覚めたら全部忘れるから。邯鄲にしては苦いようだけれど、所詮夢は夢。起きたらみんな消えてなくなる」

唇で涙を受け止めると塩辛かった。いつかの雨みたいな甘さはない。手を握ってやると彼女は握り返してきた。額とまぶたと頬と唇にキスをする。許容と憧憬と親愛と恋愛。すべてが嘘のキスを汀は梢子に与える。優しさだった。すべて嘘だけれど、優しかった。

猫は夜に本領を発揮する。

弱った獲物を、これ幸いと捕獲する。

「みぎわ……」彼女は本来、理不尽や不条理に屈するほど弱くはない。

けれど人は変調する。強いかと思えば次の一瞬には弱くなる。

梢子は心を失くしている。失望と憤慨によって、一時的に心は何も求めなくなっている。

そんな彼女を、汀は極限まで甘やかした。

「大丈夫、あたしがいる。もう怖い夢は見ない」

今の梢子は身体だけの存在で、それは素直に汀へ縋った。首筋に腕がまわされて、引き寄せられる。うん、というふうに汀は小さく頷いて、望まれるまま彼女の唇に自身のそれを重ねた。

ベッドへ潜り込むと生々しい温みが充滿していた。鬼の冷たさと対峙してばかりの汀にとって、その温度は抗いたいほど心地よい。

弱った彼女を、汀は包み込んで優しく撫でさすって慰めて守る。

人は変調する。しかし復調する。

放つておけば自分で勝手に立ち直ったはずなのに、汀はそれを阻害する。

健全さを邪魔するそれは、人でなしの所業だった。

失望も憤慨も原因ではなく荒く呼吸。涙を基にしない水音。意味を持たない単音が梢子の喉をひっきりなしに這い登る。深い闇は世界を停める。首筋と胸と下腹部。嘘のない、本能しかない口付け。世界が確固とする。色を持つ。汗が伝って、汀は左目だけを器用に閉じる。単眼鏡モノクルから世界を覗くモノはすべてが狂う。

凶悪な享樂が世界を満たす。平穩は丸めて捨てられる。

均衡は真つ二つで、安寧など粉々にされた。

ひそやかに、世界は焦げ目を増やしていく。増えるたびに世界の表面はざらついて、ボールは更に加速する。絶望的な進展。

その昔、「光あれ」と創造主は言った。一筋の光が生まれたことで世界は活動を開始して、生産的な営みがあふれた。た。

夜は静かなまま。  
梢子はあの子の名前を一度も呼ばなかった。

ではこの世界は。光のない非生産的なこの世界は、いつかどこかへ消えてしまうのだろうか。

そのいつかはいつだろうか。  
きつともうすぐだ。

「ん……っ」

己の指を噛んで声を抑える様が見えなだかいじらしく感じられて、汀は身体を起こすと、囁き声で「ふさごうか？」と優しく尋ねた。

意味が判っているのかいないのか、彼女は「え？」というふうに見えをくれて、それでも、ただただ本能的に、彼女は彼女を求めた。

「……ん」

表面に透明な膜が張った、とろりと濡れる瞳が汀の姿を反射する。それが隠れてから（自分と見つめ合いながらするのはあまり良い気分ではない）、彼女の唇をふさいで、割り入って、絡む。指先に引き出された罪悪がわずかに開いた隙間から短く洩れた。

本能的で暴力的な浸蝕。運命の侵食。彼女の肢体が硬直する。ふさがれていたから、圧倒的な嬌声は表に出ない。

ほんの問うだうだしてから、スイッチが入って跳ね起きようとした身体を抱きすくめて阻む。

柔らかいなあ、さりげなくクリティカルな部位に触れながら汀はのんびり思う。腕をつねられた。痛い。

嫌がるの？ 痛みに耐えながら両手で問う。

この腕を拒む、どれほどの理由が、今の君にあるというの？

ぎゅっと抱きしめたら彼女の身体から力が抜けた。

「おはよ、オサ」

「おはよじゃなくて……」

こちらに背を向けている梢子は、汀に捕まえられたまま身体を丸めた。穴があつたら入りたいという気分なのだろう。入つたのはこっちの方だけれど。汀は下品すぎるジョークを口の中だけで転がす。

なめらかな腹部を撫でる。ゆるゆるとした手つきは別にそんなつもりじゃなかったが、昨夜の名残か梢子は小さくその身を振るわせた。

「悪い夢は見なかった？」

「良い夢も悪い夢も見てない。けど、悪夢だったと思いたいことは起きてる……」

「それは残念ながら現実なのよねー」

あつげらかんと応えたら、彼女の喉が低く唸った。

本当の夢は覚えていないようだ。眠っていたからか、汀が与えた衝撃が大きすぎて、その前のことはすっかり忘れてしまったか。これもひとつのショック療法と言える。少し刺激が強すぎたようだけれど。

心を取り戻した堅物は、取り返しのつかない事態に呆然としている。「どうしてこんなことに……」とかブツブツ呟いているが、汀は説明してやるつもりがないし、きつと思いついてもしないだろうから、原因不明のまま残る。治らない病。病名は世迷とでも命名したら良いかもしれない。

まだ朝は早く、窓の外はうつすらと白い。これから薄布が一枚ずつはがれていく時間だ。意識ははつきりしているけれど、なんとなく覚醒した行動は起こしたくない。そんな気分させる夜と朝の境界線上。

だから、汀は梢子を捕まえた姿勢を保って、その温かさですり寄る。

墮落させる温度。放たれる毒に溺れる。

「……離して」

「どうして？」

「起きる、から」

脆弱すぎる理由は行使権を得られない。本当に離れたいのなら振りほどけば良いのに。正直者の不器用な嘘を、汀はなかつたことにする。

認めたくない、と彼女の背中が語っていた。色々なものから目を逸らしたがっている。これは何かの間違いだと、不運な過失で不慮の事故だと、そう思ったがっている。思うまでもなくそれで正しい。

自分たちのどこに、正しいものがあるというのだろう。

間違いつづけて焦げついた期間限定の世界。試験は圧倒的に不合格で、答案は誰かに見られて叱られる前に燃やして消し去る。それだけの世界。

仮想演技ロルプレイの夏は、そろそろ終わるか。

「ねーオサー」

「なによ」

「あたしって、いつもオサに怒られてるじゃない？」

「あなたが怒らせるようなことばかりするからでしょう」

「ま、そうだけど。でもそのおかげで、昨夜のオサは新鮮で、すごくおいしかった」

んふん、というふうに笑いながら告げたら、彼女は硬直して、それからがばりと飛び起きた。

「み、汀！ あなたねえ！」

「なによー。可愛かったって褒めてるのに」

ベッドについた両手をわななかせる梢子。唇が何かを言いかけたが具体的な言葉にならなかったのか、そのまま閉じた。顔は湯気でも出そうな勢いで赤い。

起こした上半身の胸元まで赤く色づいているのを視認して、良いアングルだ、と汀は思う。

大丈夫、離せる。

触れていなくなつて、こんなふうには話せるから、平気だ。

嘘だつたけれど。

恋でも愛でもない肉体の摂食欲求だから、言葉なんかで腹は膨れない。

けれどそんなふうにも思わなければ、夏の終わりに立てないではないか。

「い、一年、連絡もしなかったくせに、どうしていきなり、こんな……」

「ひと夏の思い出作りつてところかしら。ま、オサも猫に噛まれたと思って見逃してよ」

傷もつかないような甘噛みは、彼女の身体になんら跡を残していない。そんな不始末はついたりしない。

不器用な正直者が溜め息をついて、汀の額に落ちた髪をさらさら撫でた。

「猫っぽくても、あなたは人でしよう」

起こしていた上体を倒し、到達するのは汀の唇。

猫を可愛がるじゃれ合いの気楽さはなく、害悪は人なしに毒をそそぎこむ。

世界が焼けただれる。

ミギーさんは嘘つきですね、と幻の百子が汀に言った。

「もしもの話なんだけど」

「え？」

至近距離で梢子を見つめながら汀は問う。

「あたしとやすみんが崖から落ちそうになっていたら、オサはどっちを助ける？」

王は過ちを犯してはならない。

同じ姿の天使と悪魔、そのどちらに頼ることもなく、自分で正解を見つけないといけない。

梢子は質問の意図が読めなくて眉を寄せたが、考えるそぶりも見せずに返答した。

「保美」

汀はホツと息をつく。良かった、彼女は正しい

ゆるゆると頬をくすぐられる。昨夜の余韻たる、積極的な接触欲求。

満足して油断した汀は、梢子の次の言葉に射抜かれる。

「だって、あなたはどんな手を使っても私のところに来るじゃない」

それは一条の稲妻となって停止した世界に落ちた。

濃い闇に包まれた世界がその姿をあらわにする。

雷音がとどろく。「光あれ」と統治者<sup>ライオン</sup>は言い、空から落ちた灼光が世界を焼き尽くす。焦げてただれた世界は稲妻の熱に融けて、万物が混じり合う混沌の海となり、冷え固まって。

平坦で平穏な大地を持つ、世界になった。

汀が目を閉じる。それは祈りに似ていた。

「オサ、それってわりと自信過剰じゃない？」

「な……っ、別に、そんなつもりじゃ」

笑えてくる。

終焉の予感、錯覚か。

終演の気配は、幻だったか。

もしもの話だけれど、崖から落ちそうになったら、確かに汀はどれだけ卑怯な手段でも厭わず使って這い上がるだろう。それはあの時、海底に飛び込んだのと同じ根源だった。目的地はいつも同じでプラスもマイナスも無関係。大切なものはたったひとつ。

絶対的で決定的な、小さな猫などひれ伏すしかない世界<sup>ライオン</sup>の王だ。

空の白さは薄らんで、すでに有機的な青さを持ち始めている。今日も暑くなりそうだった。

暑いなら暑いで良いな、と思った。

それでこそ、夏だ。



「オサー」

腕を延ばして彼女の身体をつかまえる。柔らかな裸身が重なって、速くも遅くもない鼓動が伝わってくる。

それは幸福のリズムをしていた。

焦げて隔たっていた世界は融けて、境界は失われ、二人が立つのは平穩でなだらかな放世界。

「もう少しだけ、こうしていい？」

「なによ汀、ひよっとして甘えているの？」

「ん。そうかも」

「……しようがないわね」

どこことなく不機嫌そうな表情で（つまり、プラスとマイナスの逆転なのだけれど）梢子は呟き、引き寄せてくる腕に逆らわずされるがままになった。

肩口に顔をうずめた姿勢で梢子がまぶたを下ろす。「十分だけね」囁きに、「ん」と相槌を打った。とはいっても了承の意味ではないけれど。約束破りは得意技だ。

十分後、彼女はいつも通り怒るだろう。その頃にはきつと余韻も消えている。

梢子がまぶたを上げないままわずかに身じろぎする。ごく自然に、汀は意識をそちらに向けた。

「昨日の今日じゃ、ナミ、疲れちゃうかしら」

「また遊ぶっていう約束？」

「ん……。ナミ、明々後日には帰るそうだから。保美もあまり調子が良くなさそうだったのよね。明日にした方がいいかしら」

「ナミはまだ小さいからね。続けざまに連れまわしちゃうのも負担が大きいんじゃない？」

「そうよね」

じゃあ明日にしよう。梢子は言う。保美とも連絡を取り合って、どこへ出かけるか決めて、三人で遊ぶのが良い。

浮き立つ未来に汀は現れない。心が望むものに、勝手気ままな猫は存在しない。汀自身、そのことに不満はなかった。

彼女はただこうしてくれていれば良い。夜と朝の間だけ、夏の暑さが最も静まるいつときの静穏だけ、ともに過ごしてくれたら良い。

「ああ、保美に連絡しておかないと。あの子、何も言わないと気を揉んじゃうタイプだから」

「だったら、早めに言ってあげなさいよ」

「あなたに言われなくなっただけで判ってるわよ」

むすりとした返答。汀は見えない位置で目を細める。

「どうかしらね」

本当に判っていたら、とっくに変わっていてよいのに。

彼女たちについてはそれでいいのに。

自分たちには、どれだけ経つても転機が訪れなければ良い。そういうのにはもう飽いた。人が鬼になったとか、友情が愛情になったとか、嘘が本当になったとか、そういう不運はもういらぬ。己が人でなしになった、小山内梢子に出逢った、その不運だけでももう満腹だ。

夏は終わって秋が来て、冬と春を過ぎればまた夏になる。そういった繰り返しだけがあれば良い。変化などいらぬ。現実的でない、何も生まない、何も失わない循環遊戯ループプレイの夏。それだけでいい。

一度目の夏の終わり間際、喜屋武汀は小山内梢子を包み込んでいる。

「ううー、暑いー」

「離れたらいいじゃない」

「……オサ、冷たい」

「暑いなら丁度良かったわね」

確かに丁度良かった。

情熱的な感情は不要だった。

必要なのは侵蝕する害悪と侵食する快樂。

光の熱で融けた世界に、何かが芽吹く気配はない。